

屋久島世界自然遺産登録 20 周年記念シンポジウム in 東京

- 日 時 : 平成 25 年 10 月 20 日 (日) 13:30~16:30
- 場 所 : 東京大学農学部弥生講堂
- 参加者 : 約 170 名



シンポジウムの成果

- ・世界遺産の核心部である山岳部の利用について、島内外の視点から課題について共有
- ・山岳部の環境保全と利用の問題から屋久島の将来を考え、あるべき姿について展望した

●第Ⅰ部 基調報告

『屋久島世界自然遺産 20 年の歩み

～遺産登録の効果と残された課題～

加藤 倫之 (屋久島自然保護官事務所)

『屋久島・岳参りの復活』

中川 正二郎 (宮之浦岳参り伝承会)

『世界遺産登録後の屋久島の利用動向』

柴崎 茂光 (国立歴史民俗博物館 准教授)

●第Ⅱ部 パネルディスカッション

『島外からみた世界遺産の島

“屋久島”への期待』

コーディネーター

土屋 俊幸 (東京農工大学大学院教授)

パネリスト

荒木 耕治 (屋久島町長)

鯨本 あつこ (離島経済新聞社 代表)

柴崎 茂光 (国立歴史民俗博物館 准教授)

神谷 有二 (山と溪谷社)

中川 正二郎 (宮之浦岳参り伝承会)

寺崎 竜雄 (公益財団法人日本交通公社理事)

● 第Ⅰ部 基調報告概要

『屋久島世界自然遺産 20 年の歩み～遺産登録の効果と残された課題』

加藤 倫之 (環境省 屋久島自然保護官事務所)

- ・世界遺産登録の経緯、理由、現状の保護管理体制や順応的管理など概要を説明。
- ・遺産登録後に残された課題の一つとして山岳部利用の問題を挙げ、その対策として以下の4点が挙げられた。

- ① どういった体験を通じて、何を感じてもらいたいかの決定
- ② 利用体験の質に応じた整備水準の設定 (施設整備のめりはり)
- ③ 観光客を登山者にする仕組みの導入
- ④ 受益者負担、利用者負担による遺産地域の保安全管理



『屋久島・岳参りの復活』

中川 正二郎 (宮之浦岳参り伝承会)

- ・屋久島島民の自然に対する関わり方や、山岳信仰「岳参り」について説明。
- ・世界遺産登録後、有史最大の脚光を浴び、一般の人が本来聖域である危険な奥山に気軽に入りすぎている。
- ・山への畏敬や感謝の念の欠如が、遭難など山での様々な問題を引き起こしていると考えられる。岳参りはその心を失わないための行事。
- ・畏敬、感謝の気持ちこそが自然に対する心構えとして重要。



『世界遺産登録後の屋久島の利用動向』

柴崎 茂光 (国立歴史民俗博物館 准教授)

- ・縄文杉、白谷雲水峡、いなか浜は利用者増加。特定の観光地に利用が集中。
- ・里地の魅力的な部分を押し出したブランド化が重要
- ・文化的遺産が失われる可能性が生じている点を指摘
- ・対症療法的な対応ではなく“どうあるべきか”という抜本的な対応が必要



● 第Ⅱ部 パネルディスカッション概要

- ・一極集中（縄文杉など）から利用分散を図ること、山に対する畏敬の念を持つことが重要
- ・世界遺産地域のフロントランナーとしての位置づけ。他地域の見本となるべき存在
- ・地域の文化、歴史に根差した管理をもう一回見つめ直すことが必要

● パネリストの主な発言

① 山岳部利用のあり方について

【寺崎】観光屋目線で見ると、屋久島はちょうど転換期に来ている。資源の状態、観光客の満足度、地域経済の状況、住民の意識の4つの視点から、



現状を客観的に把握し、今後の方向性を検討し、共有することが重要。世界遺産のフロントランナーとしてしっかりしたビジョンを出すことが必要。

【神谷】屋久島は山好きとしては、人が多そうでいやだなという印象。ブランドの島となっている屋久島で自然や人々の生活の問題が解決できなければ、日本のどこでも解決できない。登山者と観光客は分けて考えるべきで、それぞれに向けたメッセージの発信が大切だと思う。



【中川】奥岳は地元にとっては怖い場所。素人が単独で入ることを禁止したほうが良い。マナー面では心に訴えること、神様へのおそれを持つことが効果的。山に登ったら万歳や制覇ではなく、“ありがとうございます”という気持ちが大切。



② 里への注目について

【鯨本】離島の中でも屋久島は知名度が高い。人の面白さも伝えたい。人も含めて自然。島では自分たちが島を守っているという意識が強い。そこに外の者が「世界遺産」と



いう指定をしている。「生命の島」という雑誌が自然遺産指定よりも前に発行されている。伐採反対の歴史。そういう精神性がすごい。今後は屋久島取材するときどういう言葉で発信するか。情報デザインを考えることが必要。



【荒木】1割以上は外からの移住者。いろいろな価値観の方がいらっしゃる。もともと島に住んでいる者と移住者の間に温度差があるのも事実。保全か伐採かで揺れた歴史もある。いま合併をして6年目、ようやく自分たちの島を自分たちの目線で考える時が来た。今までの20年をきちんと検証し、自然だけが豊かになるのではなく、そこに暮らす人々の生活が豊かになるよう頑張っていきたい。



【柴崎】世界遺産（の効果）が観光だけで良いのか。建設業や農業・漁業が低迷する中での観光へのシフトがある。公的機関がさまざまな選択肢を出すべき。（山の）観光だけでない屋久島の魅力を高めることで、山の利用集中も減り、来島者も楽しんでもらえるのではないかと。いまの屋久島の子供たちは、世界遺産に登録されたから守らなければならない、という生活実感から離れた意識でいる。子供たちに原体験をさせることが必要。



【土屋】屋久島の持つ多様性をもう一度皆さんで共有して、理解し合って話し合いをしながら方向性について決定していくべき。今がその決める時である。



主催：九州地方環境事務所

共催：九州森林管理局、屋久島世界自然遺産登録20周年記念行事実行委員会